法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-31

『太平記』における大館氏と江田氏の考察―鎌倉攻め極楽寺坂切通の記述を中心に―

髙野，宜秀

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
69
(開始ページ / Start Page)
282
(終了ページ / End Page)
272
(発行年 / Year)
2012-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008289

Hosei University Repository

『太平記』における大館氏と江田氏の考察

―鎌倉攻め極楽寺坂切通の記述を中心に―

法政大学　大学院紀要　第69号抜刷
2012年10月

高野宜秀

Hosei University Repository

『太平記』における大館氏と江田氏の考察—鎌倉攻め極楽寺坂切通の記述を中心に—

人文科学研究科　日本文学専攻
国際日本学インスティテュート
修士課程2年　髙　野　宜　秀

はじめに

元弘三（一三三三）年五月に実行された新田義貞の鎌倉攻めは、鎌倉幕府の存亡にとって重要な天下分け目の天王山であった。この鎌倉攻防戦の展開は、一般的に『太平記』の記述をもとに理解されるケースが多い。実際、義貞のふる郷にあたる地元群馬県の地方自治体編纂の『群馬県史』〈通史編・資料編〉や『太田市史』〈通史編・史料編〉、『新田町誌』〈第四巻特集編新田荘と新田氏〉、『尾島町誌』は『太平記』の記述を史料として論文内で引用し、史料編にも史料として掲載している。

『太平記』によれば、元弘三年五月一八日から始まるとされる鎌倉攻めの陣立てでは、新田義貞が軍団を三手に分けて鎌倉幕府の得宗北条高時に挑むことになったという。そして、新田義貞は実弟の脇屋義助を従えて化粧坂切通に向かい、堀口美濃守貞満・大嶋讃岐守義政を小袋坂切通へ、大館宗氏と子息の幸氏・氏明・氏兼、江田行義を極楽寺坂切通へ遣わしたと記されている。[一]

こうした軍団編成の中で私が特に注目したのは、極楽寺坂切通へ遣わされた大館・江田の両氏である。なぜ、この両氏が重要なのかというと、『太平記』が描く南北朝内乱の中でとても重要な役割を担わされているからだ。新田義貞と脇屋義助の命運を分けるターニングポイントでは必ず姿を現し、新田氏軍団の行く末を左右する存在として描かれているからだ。

鎌倉攻め以降の『太平記』の記述によれば、延元元（一三三六）年三月の中国地方平定作戦では、瘧病のため、あるいは後醍醐天皇から賜った勾当内侍（世尊寺経尹の女）との愛に溺れてしまったために出陣を延引したとされる新田義貞に代わり、大館氏明と江田行義の両人が大将として足利氏一派追討のために出陣した。この時の出陣の遅れが、足利尊氏・直義兄弟に再起（九州からの上洛）を許す時間を与えることにつながった。このことは同年五月の湊川の戦いにおける楠木正成・正季兄弟の戦死という後の戦局に結びついている。さらに同年一〇月一〇日、後醍醐天皇の比叡山下山の際には、大館氏明と江田行義は揃って、義貞・脇屋義助兄弟と袂を分かち、後醍醐天皇とともに帰京している。その後、新田軍は雪深い越前国における足利方（斯波高経）との戦いで劣勢を強いられ、これまで一緒に戦ってきた大館氏明・江田行義という歴戦のつわものを欠くことから、その気勢も一気に低下したと考えられる。その結果、義貞は杣山城周辺を抑える瓜生氏一族や越前一之宮気比大社の気比氏へ依存せざるを得ない苦しい状況に陥り、越前国平定の拠点金ヶ崎城と義貞の後継者と目されていた嫡男の新田義顕を失うことにつながった。[二] そして、後醍醐天皇方総大将としての面目を保つ唯一の錦の御旗として、有効に機能させるはずだった恒良親王や尊良親王まで失う最悪の事態を招いてしまった。

Hosei University Repository

従来の歴史学の分野では、新田義貞個人の軍事的能力や政治的立場、南朝方での役割や意義に関する研究が多かった。また、『太平記』における新田氏研究では、他の武将（足利尊氏など）との比較を通じた義貞の人物像の考察が中心であった。しかし、『太平記』における新田義貞をメインに扱う従来の研究では、新田氏一族全体を面的に考察することは試みられていない。

そこで、私は元弘三（一三三三）年五月の鎌倉攻めの重要な局面である極楽寺坂切通における大館氏・江田氏の両大将という関係を、『太平記』と当時の史料を対比させる手法を導入して、考察を行った。『太平記』によれば、大館氏明と江田行義は緊密な連携関係を持つ存在として描かれている。『太平記』に記されるような大館・江田両氏の関係は実際にあったのか、史料との比較・検討を通じてその記述を検討したい。

一．大館氏明と江田行義について

最初に大館氏明と江田行義の動向を述べたい。

大館氏は新田氏本宗系統の有力者であり、大館氏明の父大館宗氏は元亨年中に岩松政経（岩松経家の父）と「一井郷沼水」（現在の国指定史跡重殿水源）の用水権を巡って争ったこともあった。[三] 大館氏明（？～一三四二）は、上野国新田荘大館を名字の地とする新田氏一族である。『太平記』によれば、大館氏明の活動は以下の通りである。元弘三（一三三三）年五月の鎌倉攻めでは、父宗氏が稲村ヶ崎辺りで戦死した後に采配を引き継いで戦っている。箱根竹之下での敗戦後は、京都をめぐる攻防戦において細川定禅の立て籠もる三井寺を奇襲する作戦を献策し、新田軍の勝利に貢献した。大館氏明は、九州へ逃れた足利尊氏・直義兄弟を討つために病気の新田義貞に代わり、江田行義とともに中国地方平定のために出陣した。播磨国室山では赤松則村（円心）を撃破して気勢を上げた。ところが、大一番の湊川の戦いで再挙した足利軍の前に敗れた。延元元（一三三六）年一〇月の比叡山下山後は、伊予国の守護として土居・得能氏と四国平定を目指したが、伊予に下向した脇屋義助の病没後に劣勢となり、世田城を細川勢に攻められ自害した。[四]

一方の江田氏は新田荘内世良田にある東関最初禅窟として知られる長楽寺（顕・密・禅三學研修之寺）を建立した世良田氏から分派した系統である。南北朝内乱時には、世良田氏惣領家は足利方に味方している。江田行義（？～一三五三？）は、新田氏一族世良田氏系統の武将である。『太平記』によれば、元弘三（一三三三）年五月の鎌倉攻めでは大館宗氏・幸氏・氏明・氏兼と一緒に極楽寺坂切通の大将として活躍したとされる。足利尊氏が九州に落ちた後は、その討伐のために大館氏明とともに中国地方へ出陣した。延元元（一三三六）年一〇月の比叡山下山後、丹波国で奮戦したが、その後の消息は不明となっている。[五]

このように大館氏明と江田行義は、後醍醐天皇の比叡山下山の際に義貞の采配から離れる決断を下したが、その後も引き続き南朝方として活躍している点で共通している。

次に本論で扱う鎌倉攻めにおける新田軍と幕府（北条）軍の軍団編成を見ていきたい。

『太平記』巻十によれば、新田義貞と脇屋義助兄弟の新田氏本軍が化粧坂切通に向かって、金沢貞将と対戦している。小袋坂切通には、新田氏本宗系統の堀口貞満と後に足利方に転じる大嶋讃岐守義政が両大将として遣わされ、洲崎で執権赤橋守時と激戦を繰り広げた。そして、大館宗氏と幸氏・氏明・氏兼の親子は江田行義と一緒に難所の極楽寺坂切通へ進軍し、大仏貞直と一進一退の攻防戦となった。

このように『太平記』では、元弘三（一三三三）年五月の生品明神での鎌倉幕府打倒の挙兵以後、大館氏明と江田行義は鎌倉攻めだけではなく、重要な局面で

Hosei University Repository

義貞と脇屋義助兄弟を支え、まさに新田軍の中核を担ってきた重要な人物として位置づけられている。

二・『太平記』における鎌倉攻め極楽寺坂切通での大館氏と江田氏

それでは、『太平記』の記述において、極楽寺坂切通の戦闘場面がどのように描かれているのか、実際に見てゆきたい。『太平記』には様々な伝本が現存しているが、比較的古態本と位置づけられている西源院本から該当部分を引用する。

西源院本『太平記』巻十「鎌倉中合戦事同相模入道自害事」[六]

去程ニ源氏八十萬騎ヲ三手ニ分テ、各二人ノ大将ヲサシソヘテ、三軍ノ師ヲ司トラシム、其一方ニハ大舘次郎宗氏左将軍トシ、江田三郎行義ヲ右将軍トシテ、其勢都合十萬余餘騎極樂寺坂ノ切通ヘ向ラル、一方ヘハ堀口美濃守貞満并ニ大嶋讃岐守ヲ大将トシテ、七萬餘騎小袋坂ヘ向ハル、一方ヘハ新田小太郎義貞舎弟脇屋次郎義助ヲ大将軍トシテ大井田、山名、桃井、岩松、里見、額田、一井、羽河以下ノ一族前後左右ニ圍マセ、其勢六十萬騎ニテ気和井坂ヨリソ向ハレケル、

〈中略〉

源氏三方ヨリ寄ケレハ、平家モ勢三手ニソ分ラレケル、其一方ヘハ金澤越後守有時ヲ大将軍トシテ、安房上総下野ノ勢ヲ三萬餘騎相添テ、気和井坂ヲ防カル、一方ハ大佛陸奥守貞直ヲ大将軍トシテ、甲斐信濃伊豆駿河ノ勢五萬餘騎ニテ、極樂寺ノ切通ヲ防カル、一方ヘハ赤橋相模守大将トシテ、武蔵相模出羽奥州勢六萬餘騎ヲ以テ、洲崎ノ敵ヲ防カル、此外末々ノ平氏ノ一族八十餘人、國々ノ兵十萬餘騎ヲハ、時ニ取テ弱ハカラン方ヘ向ヘシトテ、鎌倉中ニ残置タル、

冒頭の部分から分かるように、大館宗氏と江田行義は極楽寺坂方面へ向かう両大将（大館宗氏左将軍・江田行義右将軍）として姿を現している。『太平記』のみの記述からは以下のことを指摘できる。新田義貞が自らに近い本宗系統の大館宗氏と世良田氏系統の江田行義を両大将にした。作者は大館・江田両氏をともに義貞から信頼のある存在として位置づけているのであろう。また、大館宗氏と江田行義を一軍の両大将として併記することから作者は、大館氏と江田氏の関係が良好だったと認識している点も注目される。従来の歴史学研究でも、この『太平記』の記述に従い、大館氏と江田氏が連合して極楽寺坂切通突破へ向かったとするのが通説になっている。しかし、『太平記』は文学作品であり、一次史料の古文書を裏づける信憑性の高い記事もあるが、脚色の多い部分のあることも否定できない。

大館氏と江田氏との関係を考える上では、元弘三年五月八日の生品明神挙兵時の天正本『太平記』の記述が示唆的である。以下にその記述を引用する。この天正本『太平記』は、諸伝本の中で最も歴史的事実を詳述した本として位置づけられている。[七] なお、この新田氏一族の生品明神挙兵の部分は、神田本も天正本の記述を切り継ぎしている。

この生品明神は、鎌倉時代に成立した「上野國神名帳」の中に「従三位　生階明神」と記述され、新田荘内で長楽寺とともに氏族の崇敬を集めていた。[八]

天正本『太平記』巻十「新田殿擧義兵事」[九]

同五月八日卯尅ニ生品明神ノ御前ニテ旗ヲ擧テ綸旨ヲ披テ三度是ヲ拝シ笠懸野ヘ打出ラル、相随人々ニハ氏族ニ大舘二郎宗氏、子息孫二郎幸氏、二男彌二郎氏明、三男彦二郎氏兼、堀口三郎貞満、舎弟四郎行義、岩松三郎經家、里見五郎義胤、脇屋二郎義助、江田三郎光義、桃井二郎尚義是等ヲ宗徒ノ兵トシ、百五十騎ニハ過サリケリ、

Hosei University Repository

この生品明神挙兵の記述では、義貞に従う氏族として真っ先に大館氏親子の名前があがっている。江田行義は、「光義」と誤記されて最後の方に記述されている。ここで興味深いことに気づく。それは、多くの一族は各系統を代表する人物を一人ずつしかあげていないのに対して、大館氏は宗氏と子の幸氏・氏明・氏兼の四人の名をあげており、堀口氏も兄弟二人の名前をあげていることである。大館氏と堀口氏は新田氏本宗家から分かれた系統であり、比較的義貞に近い血筋の家柄であるため、他氏のように一人（各系統の代表者のみ）ではなく、親子（大館氏）や兄弟（堀口氏）の名を含めて交名の最初の方に名前をあげているのであろう。本宗系統のすぐ後には実力者の岩松経家（足利氏と新田氏の血統を受け継ぐ）が来て、その後に名のあがる里見氏も新田義重（上野国新田荘の開発者・新田氏の祖）の子どもの代から興った系統で、一族内の有力者である。脇屋義助は義貞実弟であるが、脇屋氏の系統は義助から始まるので新興の家柄となる。最後に名前のある桃井氏は、新田氏一族というよりも足利氏寄りの人物であり、義貞から見ると外様の観が強い。

このように氏族の並び順を見て行くと、江田氏の位置づけは新田氏一族の中で必ずしも高いものではなかったと考えられる。天正本『太平記』を読む限りは、作者が義貞に血統的に近い本宗系統の大館・堀口の両氏を重要視していることが分かる。歴史的事実を詳述するという天正本の特徴を踏まえても、この記事は新田氏一族の力関係を考える一つの参考になるであろう。

天正本『太平記』は、大館氏（本宗系統）と江田氏（世良田氏系統）の家格の差を理解していたようだ。他の伝本にそのような認識はなかったのではないか。というのも、先ほど引用した西源院本の鎌倉攻めの三軍団の編成に関する記事では、大館宗氏と江田行義が左将軍・右将軍として並び立つ存在として描かれていた。つまり、両者をほぼ同格の人物としてとらえていたのであったが、そこには事実からの乖離が指摘できるのである。

三．史料から考える極楽寺坂切通の大館氏と江田氏の連携

このような『太平記』の記述を踏まえて、史料上では極楽寺坂切通での大館氏と江田氏はどのようなかたちで現れるのか見ていきたい。

大塚員成軍忠状写（東京都大塚文書）。

欲早賜御一見状、且備末代亀鏡、且欲恩賞、施被□面目、員成参御方、致軍忠間事、

右、今年元弘三年五月十八日、奉付新田大舘殿（宗氏）御手、於稲村崎打破車逆茂木、致合戦畢、同廿一日、付新田大舘孫二郎（幸氏）殿御手、於濱鳥居脇懸入、大勢中責戦之刻、員成舎弟三郎成光令討死畢、同廿二日、押寄葛西谷致合戦、若党中野新三郎家宗令討死畢、此條相模國御家人大多和太郎遠明、同國御家人海老名河藤四郎頼親令見知畢、然早給御一見状、且備後證、且欲恩賞、為施面目、仍言上如件、

元弘三年六月　日

「一見状給了」

「此正文ハ、恩賞奉行土佐守兼光許へ、大将軍幸氏副注進上了、取置奉行人久穂、橋中請取了、仍孫四郎様ニ申置了」

この史料は、常陸国の大塚員成が新田軍に加勢し、大館氏の指揮下で稲村ヶ崎周辺や浜鳥居で幕府軍勢と対戦し、弟の三郎成光が討死したので戦功を認めてほしいという内容になっている。大塚氏は初め大館宗氏に従っていたが、その後に宗氏の子大館幸氏の指揮下で奮闘している。「新田大舘殿」（大館宗氏）の名が、鎌倉攻略戦の初日である五月一八日に見えている。しかし、その三日後の二一日

Hosei University Repository

には采配を振るうのが子息の「新田大舘孫二郎殿」（大館幸氏）へと変わっている。これは、『太平記』における大館宗氏討死の記事（幕府方の本間氏に討ちとられる）と一致し、宗氏の討死を裏づける史料である。

大塚員成申状案断簡[二]

常陸国大塚五郎次郎員成謹言上

欲早鎌倉二階堂御所後山上陳屋勤仕分明上者、任一見状、預恩賞、弥抽奉公忠勤子細事、

副進

一通　一見状案

右、去年元弘三年五月、鎌倉合戦之時、若御料御座之由承及、馳参于御方、新田中務大輔（大舘）幸氏于時孫二郎為大将軍致軍忠之間、注進分明也、就中自六月一日至于今、二階堂御所山上陳屋勤仕不退転之条、紀五左衛門尉明白也、将又今年建武元三月鎌倉

（以下欠）

こちらも先にあげた史料と同様に、大塚員成が大館幸氏の指揮下で奮戦した記事である。父宗氏の戦死後に指揮系統が子息へ受け継がれたことを証明するものである。興味深いのは、大塚氏が鎌倉攻略後の新田・足利両氏の力関係をよく観察して、足利千寿王の二階堂陣所に奉公して、恩賞にあずかろうと考えていることだ。大塚員成は、鎌倉攻めにおいては新田氏の大館幸氏の下で戦ったが、あくまでもそれは足利千寿王が参加したことを知った上で馳せ参じたのだと強調している。まさに新田氏と足利氏の力関係をよく見た上での判断と考えられる。

石川義光軍忠状[三]（石川文書）

□奥国石川七郎□□義光謹言上、□可給御挙□□□□□聞間事

右、去五月十七日元弘三馳参相模国世野原、同十八日稲村崎致散々合戦之時、被射左膝畢、同時合戦之間、藤田左近五郎・同又四郎見知畢、同廿一日□□日者、於前浜致忠節之条、岡部又四郎・藤田十郎三郎又以見知畢、然早給御判、為欲恩賞、恐々言上如件、

元弘三年十月　日

「一見候了（花押）（大舘氏明）」

この軍忠状には、石川義光が負傷したのでそれを大館氏明（大館宗氏の子）に認定してもらうという案件が記されている。石川義光は五月一八日に稲村ヶ崎で戦闘を行っており、その時に左膝を射られてしまった。その三日後の五月二一日には、前浜で戦ったとある。大館氏明が花押を据えている。氏明が、父宗氏戦死後にこの方面の大将として指揮をとっていた様子をうかがい知ることができる。宗氏の戦死後に指揮系統が幸氏や氏明に引き継がれた実態を示すものである。

天野経顕軍忠状写（広島県天野文書）[三]

天野周防七郎左衛門尉経顕申子息三郎経政関東合戦事

右、去元弘三年五月十八日、経顕・経政最前馳参于片瀬原（河脱カ）、則奉属于此御手、懸破稲村崎（同郡）之陣、迄于稲瀬川幷前浜鳥居脇、（致脱カ）合戦忠之処、若党犬居左衛門五郎茂宗・小河彦七安重・中間孫五郎・藤次男等令討死訖、自同十一日廿一日迄于廿二日之葛西谷之合戦、致軍忠訖、此等之次第御見知之上、同時合戦之間、新田矢島次郎・上野国住人山上七郎五郎見知之間、就捧請文御注進上者、為後証欲申賜御証判矣、仍言上如件、

元弘三年十二月　日

Hosei University Repository

「一見了（花押影）（大舘氏明）」

こちらの史料も大館氏明が承認の花押を据えている。この天野氏は、先に引用した史料に見える陸奥国の石川氏と同様に、稲村ヶ崎や前浜で戦っていたことが読み取れる。天野氏方の若党が数名死亡したとその名が列挙されており、激戦が展開された模様である。見知したのが、新田氏一族の矢島氏や上野国の在地武士山上氏となっており、この方面で新田氏一族以外の上野国武士の存在していたことが分かる。

次は、陸奥国の南部氏史料であるが、南部時長・政長の軍忠の記事に世良田満義が姿を現す。この世良田満義は世良田氏嫡流であり、江田行義のいとこにあたる。

南部時長・師行・政長陳状案（南部光徹氏所蔵遠野南部文書）[一四]

目安

甲斐国南部郷以下所領事

訴人南部三郎次郎今者刑部丞武行

論人南部五郎次郎時長

同又二郎師行但為宮（義良親王）供奉奥州下向、

同六郎政長

〈中略〉

一　時長・政長等於御方抽軍忠子細事

時長者、最前馳参御方、於関東致合戦之忠、親類中村三郎二郎常光、五月廿日討死之条、新田三河弥次郎（世良田満義）見知畢、同廿一日、霊山大将軍武田孫五郎（長高）相共、愚息行長懸先、若党数輩被疵畢、同廿二日、於高時禅門館、生捕海道弥三郎、取高時一族伊具土佐孫七頸畢、将又七月十二日、押寄三浦山口、三浦若狭判官（時明）相共、令退治悪党畢、次政長自奥州、最前馳参御方、自五月十五日至同廿二日、於所々致合戦、若党守家討死畢、巨細披載注進歟、是五、右、子細雖多、被召決之刻、一烈御下文承伏之上者、武行不可依無窮釁訴、仍粗目安如件、

元弘三年十二月　日

この史料は東北の雄、南部氏の下に属していた中村三郎二郎常光が五月二〇日に戦死した際に、新田三河弥次郎（世良田満義）が見知したという内容になっている。従来の研究においては、世良田氏・南部氏の活躍と、鎌倉攻めにおいてこの方面が激戦区だったことを知る一つの史料として扱われていた。

しかし、私がまず注目したいのは、新田三河弥次郎（世良田満義）が戦っていた場所である。この史料では続けて「同廿一日、霊山大将軍武田孫五郎（長高）相共、愚息行長懸先、若党数輩被疵畢」とある。霊山は極楽寺・稲村ヶ崎一帯の山並であり、霊山山のことを指している。その麓に当たる部分が霊山ヶ崎である。元は極楽寺の境内であり、子院仏法寺があったとの伝承も残されている。[一五] この霊山山付近は由比ヶ浜の西端を限る境界線になっている。[一六] つまり、史料上での極楽寺坂切通周辺の戦闘では、世良田満義が大館氏と一緒に采配を振るっていたことになる。

そこで気になるのが、江田行義の極楽寺坂切通周辺での動向となるが、それを裏づける史料が発見できない。考えられる原因としては、『太平記』のいう大館氏と江田氏の両大将としての設定が実際には存在しなかったか、史料の散逸が考えられる。唯一発見できたのは、『長楽寺文書』にある江田行義の長楽寺への寄進状であった。この史料は、鎌倉攻めにおける江田行義の活躍にかかわるものではないが、その動向を考えるために引用する。

Hosei University Repository

江田行義寄進状（『長楽寺文書』[一七]）

「平塚之文書□（端裏書）」

奉寄進　上野國世良田長樂寺

右、當國新田庄平塚村内、得分弐拾貫文地、所奉寄進也、仍如件、

元弘三年七月廿日　　源（江田）行義（花押）

史料の日付は鎌倉攻め終結二ヶ月後の七月二〇日になっており、自分の所領新田荘の平塚村内の得分を一族の精神的支柱である長楽寺に寄進するという内容だ。江田氏が、長楽寺を建立した世良田氏の分家だからこそ、このような得分の寄進を行ったものと思われる。

これらの一連の史料を考察して総合的にいえることは、以下の通りである。大館宗氏は『太平記』の記述通りに戦死している。その根拠は、諸氏の軍忠状において大館宗氏が最初に姿を現した後に子の幸氏や氏明と入れ替わっており、さらに宗氏の史料はこれ以降一通も発見されないことである。大館宗氏戦死後は、幸氏と氏明兄弟がリーダーシップを発揮して、宗氏の采配を引き受けて合戦を継続した。

しかし、『太平記』の中で大館氏と両大将になっている右将軍江田行義が史料上に姿を見せることはなく、その名は鎌倉攻略二ヶ月後（七月二〇日）の長楽寺寄進状から見えるのみである。そして、霊山（極楽寺坂切通）方面では、世良田満義が指揮官級の武将として参戦していたことが確認できた。実は世良田氏の極楽寺坂方面での参戦は『太平記』にも記されている。

西源院本『太平記』巻十「鎌倉中合戦事同相模入道自害事[一八]」

安東左衛門入道聖秀ト申ハ、新田太郎義貞之北方ノ為ニハ伯父也シカハ、彼女房義貞ノ状ニ我文ヲ書副テ、潜ニ聖秀ノ方へ遣シケリ、聖秀始三千余騎ニテ稲瀬河へ向タリケルカ、世良田太郎稲村崎ヨリ後へ廻ケル勢ニ取籠ラレテ、僅百余騎ニ討成レテ、我身モ薄手余多所ニ負テ、己カ舘ヘソ帰ケル、

世良田太郎が、新田義貞の妻の伯父安東聖秀を稲村ヶ崎から回り込んで攻撃して、聖秀の軍勢に大打撃を与えている。世良田太郎という人物が世良田満義（新田三河弥三郎）とは異なる人物と考えられるが、世良田氏の極楽寺坂切通・稲村ヶ崎ラインでの活躍を示すものである。

これらの事実を整理すると、世良田満義は極楽寺坂切通周辺で大館氏と一緒に指揮官級の武将として鎌倉幕府軍と一戦を交えていたことになる。史料上の制約があるためこれ以上踏み込めないのは残念であるが、大館宗氏と江田行義の両大将という『太平記』の設定は、作者の独自の記述の可能性を指摘できる。

四．なぜ、江田行義ではなく世良田満義が史料に見えるのか

先に見たように史料上では、江田行義の極楽寺坂切通での活躍は確認できなかった。江田氏は、行義に限らず残存史料の少なさからその実態が謎に包まれている。江田氏のふる郷にあたる新田荘があった群馬県太田市には江田氏館跡が残され、国指定史跡「新田荘遺跡」の一つになっている。江田氏館跡は、新田荘のあった現地で残されているものの、それ以外の史跡や史料は少ないのが現状である。霊山（極楽寺坂切通周辺）での世良田満義の登場は当時の力関係を考える上で、とても重要であると認識している。

江田氏は世良田氏の分家筋であり、鎌倉時代初期から存在する系統ではない。一方の世良田氏は、新田氏一族の精神的支柱である長楽寺を建立した世良田義季（新田氏開祖の新田義重の子）の末裔であり、一三世紀中頃に世良田頼氏が、没落した新田氏本宗家（四代当主新田政義）に代わって頻繁に幕府へ出仕している。

Hosei University Repository

世良田長楽寺門前は定期的に市が開催され、物流・交通、銭貨、人（僧侶や商人等）の集まる要衝でもあった。[一九] さらに利根川や上野国府と新田荘をつなぐ東山道も近く、水陸両用の一大拠点であった。

この史料に現れた世良田満義（世良田氏惣領家）は、峰岸純夫が「無量寿寺文書」を使ってすでに指摘するように、元弘三年五月一二日（生品明神での挙兵四日後）に足利千寿王（後の室町幕府二代将軍足利義詮）を擁して、上野国世良田での第二次蜂起を決行した中心人物で当初から足利与党であった。[二〇] このように足利尊氏の跡取り息子を託されて挙兵するほどの実力者なのであった。

山本隆志は、『太平記』巻十の新田義貞生品明神での挙兵場面についての考察において、このとき新田氏一族全員が挙って立ち上がったわけではなく、世良田満義が義貞軍の出撃後も世良田に常駐し、足利千寿王をもりたてていたとの見解を述べている。[二一]

史料からは、極楽寺坂切通の攻撃は大館氏・江田氏との連携によるものではなく、江田氏の本家筋の世良田氏と新田氏本宗系の実力者大館氏との連携によるものであったと考える方が自然である。おそらく、江田氏は『太平記』のいう右将軍としてではなく、世良田氏の一枝流として参戦していた程度かもしれない。大館氏と世良田氏が極楽寺坂切通で共同戦線を張ることになった理由として次のことが考えられる。足利千寿王の参陣を初めから支えた世良田満義の周辺には、千寿王を慕う足利与党が集まっていた。そして、その勢力は義貞や脇屋義助兄弟としても無視できない大きなものになっていたため、義貞は世良田満義を大館氏と並ぶ大将格として極楽寺坂切通へ遣わしたのではないか。

しかし、『太平記』では大館氏と江田氏の両大将という具合に記述している。ここでもう一度、鎌倉攻めの陣立てを思い浮かべてみると興味深い事実に気づく。小袋坂切通へ向かった大嶋讃岐守義政が後に足利方（北朝）に加担することになったが、それ以外は全員新田義貞方だということである。確かに大館氏と江田氏は後に義貞の指揮下から離れるものの、南朝方一筋を貫いている。

『太平記』作者は、南北朝内乱期の新田氏と足利氏の攻防戦を知った上でこの物語を描いていることから、鎌倉攻め以降戦績の振るわない義貞軍団にとって唯一の会心の一戦であった鎌倉攻めをかなり誇張して描いたと考えられる。特に義貞が稲村ヶ崎に軍勢を集めて、自ら海の龍神に祈念した後に黄金の太刀を投ずると突如海水が引くといった、劇的なドラマのようなワンシーンを入れていることからも、このことは容易に理解できる。この背景には、幕府の最大の拠点である鎌倉を攻略し、得宗北条高時を敗死させるという戦果を義貞の力量で成し遂げたと描くことによって、義貞を後醍醐天皇方の総大将に位置づけようとする『太平記』作者の意図があったのであろう。

だからこそ、鎌倉攻めの各陣立ての大将が堀口貞満や大館宗氏親子、江田行義として設定されたと推測できる。殊に、作者は江田行義が南北朝内乱時に頭角を現したことを知っていたからこそ、極楽寺坂切通で左将軍の大館氏と並ぶ右将軍として彼の名をあげたものと思われる。挙兵当初から足利与党だった世良田満義の名をあげてしまっては、極楽寺坂切通大将の大館宗氏（新田氏本宗系統の代表格）の戦死というマイナスの事実もあったために、足利与党に終始助けてもらう描き方になってしまう。実際には、義貞の挙兵を助けた岩松経家が事前に足利氏と連絡を取り合っていたり、世良田満義が足利千寿王を擁立しての第二次挙兵を決行し、その結果、義貞軍の軍勢が雪だるま形式に増加したという事実がある。しかし、『太平記』作者は義貞を後醍醐天皇方の総大将として描くために、義貞のデビュー戦となった鎌倉攻めを足利氏一門の強力なバックアップで実現できたという構図で描くことを回避したかったものと推測される。『太平記』の作者は新田氏と足利氏を対等な源氏の棟梁として描く姿勢を持つが、これはそうした作者による妥当な判断であったと評価できるのではなかろうか。

Hosei University Repository

終わりに

今回は、鎌倉攻めの一局面である極楽寺坂切通における大館氏と江田氏の連携に焦点を当てて考察した。本論で述べたように江田氏は、『太平記』の中では重要なポジション与えられているものの、実際の史料から極楽寺坂切通における活躍の様子は見出せなかった。大館氏が各家の軍忠状にその名前が残されているのとは対照的である。史料上は、江田氏よりもその本家筋にあたる世良田氏の活躍しか確認できない。

つまり、この極楽寺坂切通の攻防戦における連携は大館氏と江田氏というよりも、大館氏と世良田氏との間で行われたのが実態だったのではないかと指摘できる。『太平記』作者が、江田行義は南北朝内乱の中で義貞軍団の中核として活躍したことを踏まえ、彼にまだ実績のなかった鎌倉攻め段階を描くにあたり、極楽寺坂切通の右将軍というポジションを割り当てた可能性がある。また、そこには足利与党であった世良田満義の極楽寺坂切通周辺での活躍を隠蔽するというもう一つの意図も存在していた。

世良田氏は、本宗家四代惣領新田政義が京都大番役中に無断出家したことと預かっていた囚人に逃げられてしまうという大失態によって没落した際に、新田氏本宗家を代表して幕府に出仕していたこともあり、『吾妻鏡』にも姿を見せている。一方の江田氏は史料も少なく、どのような活動を行ってきたのか不明の点が多く、行義にしても後醍醐天皇の比叡山下山後の動向は『太平記』以外で追うことは難しい。

現段階では、あくまで元弘三（一三三三）年五月の鎌倉攻めに限定した論であり、その後の南北朝内乱時における重要な転機となった延元元（一三三六）年三月の中国地方平定作戦における大館氏明と江田行義の連携を史料で裏づけることができるのか、引き続き史料の蒐集および調査・分析を行いたい。

注

一　『太田市史』〈通史編中世〉（一九九七年　太田市）P三二四～三二六

二　佐藤和彦『南北朝内乱』〈日本の歴史第一一巻〉（一九七四年　小学館）P七七～七九

三　『新田町誌』〈第四巻特集編新田荘と新田氏〉（一九八四年　群馬県新田郡新田町）P一四〇～一四六

四　「大館氏明」（『国史大辞典』〈第一巻〉一九九八年　吉川弘文館）P六二九

五　「江田行義」（『群馬県姓氏家系大辞典』一九九四年　角川書店）P二一五

六　鷲尾順敬校訂『太平記西源院本』（一九三六年　刀江書院）P二四六～二四七

七　鈴木登美恵「天正本太平記の考察」（『中世文学』一二号　一九六七年　中世文学会）

長坂成行「天正本太平記成立試論」（『国語と国文学』五三（二）　一九七六年　東京大学国語国文学会）

長坂成行「天正本太平記の性格」（『奈良大学紀要』一二号　一九七八年　奈良大学）

八　『新田町誌』〈第四巻特集編新田荘と新田氏〉（一九八四年　群馬県新田郡新田町）P二〇六

九　天正本『太平記』（国文学研究資料館所蔵）E一四三六

長谷川端校訂『太平記』〈新編日本古典文学全集五四〉（一九九四年　小学館）P四八二～四九二

一〇　『群馬県史』〈資料編6中世2編年史料1〉（一九八四年　群馬県）文書番

Hosei University Repository

号五六二

一一　『太田市史』〈史料編中世〉（一九八六年　太田市）Ｐ二七四

『群馬県史』〈資料編６中世２編年史料１〉（一九八四年　群馬県）文書番号六〇一

一二　『太田市史』〈史料編中世〉（一九八六年　太田市）Ｐ二七四

『群馬県史』〈資料編６中世２編年史料１〉（一九八四年　群馬県）文書番号五七二

一三　『群馬県史』〈資料編６中世２編年史料１〉（一九八四年　群馬県）文書番号五八三

一四　『南北朝遺文』〈東北編第一巻〉（二〇〇八年　東京堂出版）文書番号〇三二

一五　『角川日本地名大辞典』〈一四神奈川県〉（一九八四年　角川書店）Ｐ九三四「霊山ヶ崎」

一六　『日本歴史地名大系』〈第一四巻神奈川県の地名〉（一九八四年　平凡社）Ｐ二七七「霊山山」

一七　『長樂寺文書』（一九九七年　続群書類従完成会）文書番号七二

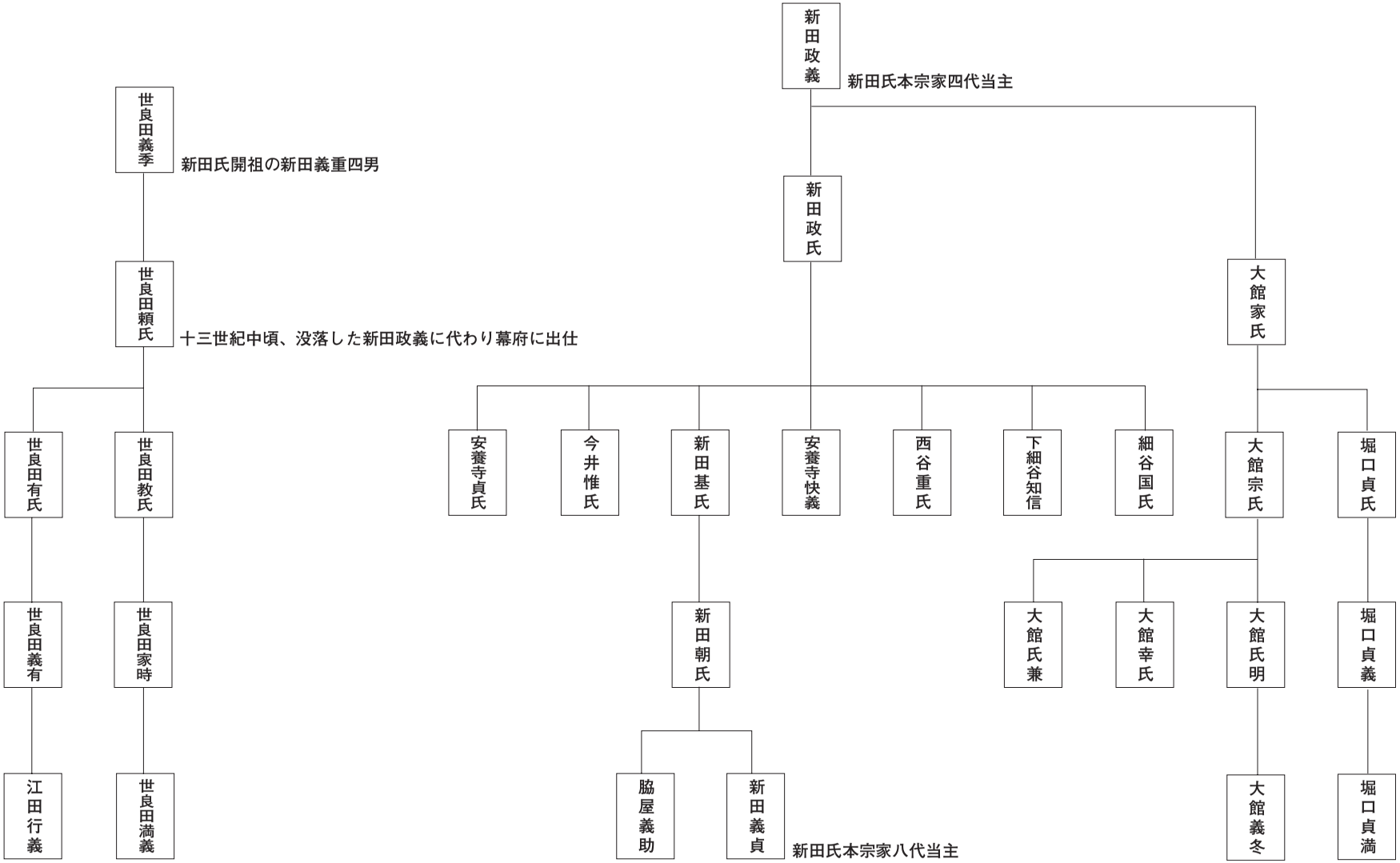
一八　鷲尾順敬校訂『太平記西源院本』（一九三六年　刀江書院）Ｐ二五六

一九　山本隆志「鎌倉後期における地方門前市の発展―上野国世良田を中心に」（『歴史人類』一七号　一九八九年　筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻）

二〇　峰岸純夫『新田義貞』（二〇〇五年　吉川弘文館）Ｐ五一～五二

二一　山本隆志『新田義貞』―関東を落とすことは子細なし―（二〇〇五年　株式会社ミネルヴァ書房）Ｐ一一四

新田氏一族（本宗系・大館・堀口・世良田・江田）　系図



Hosei University Repository